慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国人技能実習生の移動に対する主観的意味付け： 当事者へのインタビュー調査から
Sub Title	Chinese migrant workers' existential mobility : an interview-based study on technical intern trainees
Author	王, 暁音(Wang, Xiaoyin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2018
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.86 (2018.) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	In recent years, Chinese migrant workers have shown more potential for mobility. Although many previous studies have described the passive role of migrant workers in their transnational migration, they tend to plan their movements strategically and make it a beneficial throughout the course of their lives. It is necessary to examine this social phenomenon completely and conduct an in-depth analysis so as to portray the reality of their migration process. This paper examines Chinese migrant workers' transnational mobilization through a case study of Chinese technical intern trainees who went to Japan for three-year period of training. The first section reviews the literature of the study of Chinese technical intern trainees and transnational communities, especially Ghassan Hage's existential mobility theory as the framework used in this study. The second section outlines the results of the in-depth interviews conducted with eight former Chinese technical intern trainees. Furthermore, each episode is classified. In the third section, the characteristics of their movements using the framework of existential mobility and physical mobility are analyzed. The results of the interviews revealed that existential mobility and physical mobility can be transferred to each other by social capital. This was the principal theoretical finding of this paper. This study provides a new understanding of Chinese migrant workers' mobility and attempts to search for possibilities of their transnational mobilization, not only physically but also their subjective world. The findings also predict global mobility trends.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000086-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国人技能実習生の移動に対する主観的意味付け
——当事者へのインタビュー調査から——
Chinese Migrant Workers' Existential Mobility:
An Interview-based Study on Technical Intern Trainees

王　　暁　　音*
Xiaoyin Wang

In recent years, Chinese migrant workers have shown more potential for mobility. Although many previous studies have described the passive role of migrant workers in their transnational migration, they tend to plan their movements strategically and make it a beneficial throughout the course of their lives. It is necessary to examine this social phenomenon completely and conduct an in-depth analysis so as to portray the reality of their migration process.

This paper examines Chinese migrant workers' transnational mobilization through a case study of Chinese technical intern trainees who went to Japan for three-year period of training. The first section reviews the literature of the study of Chinese technical intern trainees and transnational communities, especially Ghassan Hage's existential mobility theory as the framework used in this study. The second section outlines the results of the in-depth interviews conducted with eight former Chinese technical intern trainees. Furthermore, each episode is classified. In the third section, the characteristics of their movements using the framework of existential mobility and physical mobility are analyzed. The results of the interviews revealed that existential mobility and physical mobility can be transferred to each other by social capital. This was the principal theoretical finding of this paper.

This study provides a new understanding of Chinese migrant workers' mobility and attempts to search for possibilities of their transnational mobilization, not only physically but also their subjective world. The findings also predict global mobility trends.

Keywords: technical intern trainee, transnationalism, existential mobility, social capital, China
キーワード：技能実習生，トランスナショナリズム，存在論的移動，社会資本，中国

* 慶應義塾大学大学院　社会学研究科社会学専攻　後期博士課程2年

1. はじめに

グローバリゼーションの進展に伴い，ヒト，モノ，カネ，情報・文化といった資源・情報のトランスナショナルな移動が活発になっており，移動のパターンが多様化している。交通手段や情報通信技術の発展につれ，物理的・空間的移動がより容易に達成できるようになった。一方，象徴的な意味での移動として人々が人生を辿るコースである「ライフコース」にも注目する必要がある。個人のライフコースを捉えることは，個人の生活経験をその人を取り巻く社会構造や歴史的・文化的・経済的文脈との関連から理解するのに有効である（嶋崎 2008）。また，トランスナショナルな移動を経験する越境者の個人のライフコースに関する考察は，その人がつなぐ送り出し国と受け入れ国の社会実情を知る有力な手がかりである。

トランスナショナルな移動を考える際に，マクロ構造の制度的要因だけでなく，移民の個人のネットワークや慣習，信条などのミクロ構造を視野に入れる必要がある。そして，受け入れ社会における彼・彼女たちの存在を明確にとらえるためには，送り出し社会側からもこれらの人々を捉える必要がある（田嶋 2010:14）。

日中両社会を跨ぐ中国人技能実習生は，数年にわたって受け入れ国の日本に滞在した後，送り出し国の中国に帰る一時滞在の外国人労働者だとみなされてきたが，彼・彼女たちは実質的に国際移住者でもある。技能実習生のこれまで無視されてきた国際移住者としての側面から，彼・彼女たちのライフコースを分析することにより，トランスナショナルな移動の多様性を解明することに寄与できると考えられる。

また，後述するように，中国人技能実習生のトランスナショナルな移動は，日中両社会の構造的・制度的要因に制約されているが，彼・彼女たちの自らの移動に対する主観的意味付けも重要な役割を果たしている。国際移住者としての技能実習生は，移動を自らのライフコースのなかでどのように主観的に意味付けているのか。また，こうした主観的意味付けは，彼・彼女たちの移動のあり方にどのような影響を及ぼしているのか。本稿では，中国人技能実習生の来日前，滞日中，帰国後もしくは移住後のライフコースを質的調査によって明らかにする。それによって，技能実習生に関する研究にトランスナショナリズムの理論的視点を導入することと，移民のライフコースを分析する際に「存在論的移動」という概念に着目することの有効性を示す。

2. 先行研究と理論的枠組み

2.1 中国人技能実習生の実態の変化

近年，日本における中国人技能実習生の実態が変化しつつある。長い間技能実習生全体の約7割を占めていた中国人技能実習生は，2013年から新規入国者の数と割合の両方が縮小し続けている。法務省の統計[1]によると，2017年6月末の時点では，「技能実習」[2]の在留資格を持つ在留外国人は25万1721人である。そのうち約3割に当たる7万9959人が中国人であり，その数は1位のベトナムの10万4802人を下回り，2位である。新規入国者をみると，2013年から2016年までの4年間，公益財団法人国際研修協力機構（以下，JITCO）が入国支援[3]に携わった中国人技能実習生の数は，逓減する傾向にあり，2013年の2万8850人から2016年の1万7573人に減った[4]。

中国人技能実習生の変化は，数量的なものにとどまらず，技能実習制度の利用者たちがそれぞれ異な

る目的を持つことに留意しなければならない。建て前上，外国人技能実習制度は，「開発途上国等の青壮年を，一定期間日本の公私機関に受け入れ，技能，技術または知識を修得させることにより，当該開発途上国等への技能等の移転を図り，かつ『人づくり』に寄与すること」（JITCO 2014:1）を目的で設立されたが，実際にはその利用者たちが自分自身の便益を図る方向へ導かれている。受け入れ側の日本において，技能実習生は，日本国内の労働市場のミスマッチを補い，少子高齢化の進展による人手不足を緩和するための労働力になる。一方，送り出し側の中国にとって，技能実習生は，労務輸出政策のもとで対外労務合作[5]の一形態として派遣する人々である。さらに，技能実習生自身は，自らの滞日経験を海外出稼ぎとして理解している。すなわち，中国人技能実習生は単純労働力，労務輸出，出稼ぎ労働者という複合的な定義を持つのである。それらの間に，噛み合わない部分や制度と実態の乖離が存在しながらも，長い間，日中間の労働者の継続的な移動が維持されてきた。しかも，受け入れ側と送り出し側は，お互いに相手の本音と実態を把握し，黙認した上で，技能実習生の国境を越えた移動を促している（馮 2012）。

さらに，中国人技能実習生の内実が大きく変化している。日本は単純労働者を受け入れない方針をとっているが，日本政府の現在の「外国人労働者」の受け入れの条件は，国際的には実質的に移民と解釈される（小井土・上林 2018:470）[6]。一方，中国では，「労働移民」「技術移民」「投資移民」という3回の移民ブームに続き，第4回とみなされる「環流型移民[7]」ブームが席巻している[8]。中国では移民とみなされる技能実習生も，グローバリゼーションの波に追いつき，自分自身の能動性を重視するようになって，戦略的な移動を練り上げている。また，日本社会において，2016年11月に成立し，2017年11月から施行している技能実習法によって，はじめて外国人技能実習制度に法的根拠が付与された。技能実習生の人権保護の改善にもつながるこの法律は，過酷な生活に耐える被害対象とトラブルの源の両方の性格を持つ技能実習生に法的保障を与える。従来，来日する外国人技能実習生は，「搾取される低賃金労働者――搾取する日本企業」という対立構図に置かれ，受動的な存在だと認識されてきた。しかし，技能実習生の内実とそれをめぐる状況の変化とともに，彼・彼女たちの移民としてのライフコースをトータルに捉える視点を取り入れなければならない。特に，技能実習生の日中の国境を越えたトランスナショナルな移動における可能性と能動性に注目する必要がある。

以上のように，中国人技能実習生に起こる変化を，「移動」の視点を取り入れてまとめるならば，以下の3点になる。すなわち，①移動する主体の規模の変化，②移動する／させる側の目的の食い違い，③ライフコースにおける能動性の喚起，である。とりわけ後述するように，③の技能実習生の移動における能動性は，これまで十分に研究されてこなかった。技能実習生はあくまでも移民ではなく，一時滞在の外国人労働者とみなされてきたからである。そして技能実習生の能動的な移動のあり方を考察する際に，彼・彼女たちの移動の主観的意味付けに注目することが必要である。

2.2　技能実習生のライフコース

先行研究を検討したところ，まず，制度と実態との乖離を指摘して，政策・法律の視点から制度の見直しを呼びかけるものが多い（梶田 2002；駒井 2016；外国人研修生問題ネットワーク編 2009；岸本 2015；坂 2016；「外国人労働者問題とこれからの日本」編集委員会 2009）。技術・技能の国際移転や人材育成を通して国際貢献をするという名目で，技能実習生を受け入れ低賃金労働力として活用する実態がうかがわれている。また，技能実習生に対する人権侵害や不適正行為が多発している一方，技能

実習生による犯罪や失踪[9], 不法滞在が顕在化していると指摘されている。これらの研究は，外国人研修生・技能実習生が直面する問題や受け入れ国である日本側の問題を突き止め，制度・政策への啓発的な示唆が評価できよう。しかし，低賃金労働力として「搾取される技能実習生」と「搾取する日本企業」という従来指摘されてきた対立構図では捉え切れない部分にも目を向ける必要がある。

また，地域社会の視点から，技能実習生と受け入れ先や地域社会との関係を分析する研究では，外国人技能実習生が受け入れ社会とのつながりは希薄であり，孤立される存在であるとよく指摘されている（小林 2013；馮 2012；上林 2015）。技能実習生は，多文化共生の支援対象とされている一方，地域活動への参加や地域組織への加入に積極的な意思を示していないという（坂 2016）。

さらに，異文化適応の視点から，職場における問題の多くは，日本語能力の不足や文化習慣の差異，生活環境の変化によって引き起こされると指摘されている（多文化共働プログラム　2006）。友人の有無と日本語能力の2つの要因が対日イメージに影響を与え，対日イメージがポジティブであるほど適応度も高いという（葛 2007）。日本で働き，生活するために，日本語の理解は何より重要なのに，一部の研修生・技能実習生は，それについて認識しておらず，日本語学習に興味を示さないということも明らかにされた（馮 2013）。

ほかに，より長期的なスパンで技能実習生の帰国後の生活実態を調査する研究もある。上林千恵子（2015）の調査では，帰国後の働き方について，「日本で実習した業種で働く」と答えた人はわずかであり，日本語の習得程度については，日本の就業先職場で必要とされる日本語を覚えるだけだった。このように，技能実習生の帰国後の就職状況をみると，技能実習の経験は彼・彼女たちにとって一時的な職業形態に過ぎず，その後の就職に直接な影響がないことが示されている。中国人技能実習生に関して，個人的なつながりで結成された社会的ネットワークによって連鎖移民（chain migration）[10]が生み出されることを明らかにした馮偉強（2012）の研究がある。技能実習生は母国への帰還により，出身地の農村部および転出先の都市部において，技能実習という共通の経験に基づいてインフォーマルなグループを結成すると示されている（馮 2012）。また，元技能実習生は自らの人脈を使い，海外出稼ぎを仲介する斡旋ブロッカーになって，新たな移動を促進している（田嶋 2010）。

先行研究をまとめてみると，その多くは，つねに技能実習生を受動的な立場において，日本社会における弱者として位置付けた。技能実習生が自ら結成した社会的ネットワークの形成を考察した研究はあるが，その結成がライフコースにおいてどのような意味をもつかについて十分に検討されていない。今までの研究では，技能実習生を能動的な移動主体として分析するものは極めて稀である。

浅野慎一（2007）は，技能実習生の文化的変容を把握するために，日本と中国をつなぐライフコースをトータルに捉える視点が特に重要であると指摘している（浅野編 2007: 46）。従って，本稿では，元中国人技能実習生8人に対してインタビュー調査を実施し，中国人技能実習生の来日前，滞日中，帰国後もしくは移住後のトランスナショナルな移動と，その移動の特性を解明する。

2.3　トランスナショナル・コミュニティと存在論的移動

グローバリゼーションの一側面として輸送やコミュニケーション技術の急速な革新があり，移民にとって出身地との親密な関係を維持することが次第に容易になってきている。これによって，循環的，あるいは一時的な人的移動が促進されるので，人々は経済的・社会的・文化的つながりを持つ2つまたはそれ以上の地域の間を繰り返し移住することになる（Castles and Miller 2011＝2014: 39）。

トランスナショナル・コミュニティという概念は，「移民トランスナショナリズム論」において，国境を越えて幾つかの場所を結んで形成される「トランスナショナルな社会空間（transnational social space）」の同義語として呈示されてきた（Faist 1998）。トランスナショナル・コミュニティは閉じた空間ではなく，ヒト，モノ，カネ，情報・文化といった資源・情報が集まる「磁場」として形成される（奥田 2004）。

従来，トランスナショナリズム論において，移民トランスナショナリズム（migrant transnationalism）研究が主流となっていた（広田・藤原 2016）。トランスナショナル・コミュニティの概念に対して，「下からのトランスナショナリズム（transnationalism from below）」という理論的体系を用いて解釈することが重要視されており，「移民とその支援者による草の根の活動や母国での活動」（Portes et al. 1999: 221）が研究の視野に入ってきた。

トランスナショナリズム論の研究世界をより一般化，総合化しようとするP・レビットらは，トランスナショナリズム論の研究世界を「トランスナショナリズム・スタディーズ」と総称し，それが以前にははっきりしなかった現象や動態を明確化し説明することによって，通念的な理論を補足し，伝統的な理論よりもうまく真実を明らかにする可能性を提示する（Levitt and Jaworsky 2007; Levitt and Khagram 2008）。

移民のトランスナショナルな移動を検討する際に，物理的・空間的移動だけでなく，象徴的な意味での移動も重要だと位置付けられている。前述した技能実習生のライフコースという考え方も，移動のニュアンスを含むメタファーである。

トランスナショナルな移動を遂げた技能実習生は，グローバリゼーション時代をいかに生き抜くのか。グローバリゼーションという社会現象を理解する際に，J・アーリが提示した「移動」のメタファーがしばしば用いられる（Urry 2007）。資源・情報の国境を越えた移動する過程は「フロー（流れ）」と，それらの流れを方向づけ統制するために作られる制度は「ネットワーク（水路）」と喩えられる。

また，アーリによれば，「移動」という語には，移民や半永久的な地理的移動といったもっと長期的な意味合いがある。これは水平的な意味で「移動中」という意味であり，とりわけ，「よりよい生活（ベター・ライフ）」を求めて国や大陸を移動したり，干ばつ，迫害，戦争，飢餓などから逃れたりするケースを指すことがよくある（Urry 2007＝2015: 17–19）。

「よりよい生活を求める」ための移動を概念化したのが，G・ハージの「存在論的移動」である。人々は急激な社会変動の中で，空間的移動を経験すると同時に，象徴的な移動（symbolic mobilization）も経験している。ハージは人間にとっての移動を物理的移動（physical mobility）と存在論的移動（existential mobility）に区別する（Hage 2005＝2007）。存在論的移動とは，自分の人生が停滞することなく，「人生においてどこかに向かっている」「よい方向に進んでいる」という感覚のことである。存在論的移動と物理的移動の関係は，移住という事例研究を通じてこのように説明されている。

> 「歩いている」「どこかに行っている」「走っている」といった言葉は物理的に移動の感覚を意味しているわけではない。それらは，人生の可能性と存在論的移動の感覚との密接な結びつきを示しているのだ……移住というまさに重要な物理的移動と存在論的移動との間に，転倒した関係があることが感じられる。移住という物理的移動は，人々が存在論的移動の感覚において危険を経験した時に初めて，企てられるのである（Hage 2005＝2007: 42）。

以上のように，存在論的移動の目標を達成するために，物理的移動を始めるということである。しかし，存在論的移動と物理的移動は，必ずしも対応しない（塩原 2017: 49)。物理的に留まり続けることになっても，存在論的移動を経験することができる。

物理的移動と存在論的移動との類似な概念として，中国明代末期の文人董其昌の言葉に由来した「万巻の書を読み万里の路を行く」[11]ということわざを連想させる。「万巻の書を読む」というのは，精神世界の充実を意味する一方，「万里の路を行く」というのは，物理的移動の経験を意味するのである。古代文人の読書観は人生を賢く生きる知恵と関連するので，ある意味で存在論的移動の形成につながると考えられる。それゆえ，存在論的移動という概念は，古くから中国社会でも馴染みのある考え方である。

トランスナショナル・コミュニティにおける存在論的移動のあり方は，移民の主観的意味世界を探求する重要な手がかりとなる。本稿では，移民としての技能実習生のトランスナショナルな移動が，その存在論的移動にどのような変化と影響をもたらすのかに重点をおいて述べていく。また，存在論的移動は，彼・彼女たちの物理的移動のあり方にどのような影響を及ぼすのかについても分析を行う。日中両社会に着目しながら，技能実習生の来日前，滞日中，帰国後もしくは移住後のライフコースをトータルに捉えていく。

本稿は，ミクロな視点から国際移住者の一部である技能実習生の移動の特徴を解明することにより，国際移住者の実態を探ることができる。トランスナショナリズムの理論的視点において，本研究は「下からのトランスナショナリズム」に着目し，個人のライフコースに基づいた質的研究によって，トランスナショナルな移動を促進する要因を掘り出すことができる。国境を越えた移民システムの実態を検討した上，その形成要素を補足し，移民の送り出しおよび受け入れの現状の改善に示唆を与えることができる。

3.　インタビュー調査

3.1　インタビュー調査の概要

筆者は2015年8月から2017年8月にかけて，中国の遼寧省，日本の埼玉県，東京都において，中国人研修生・技能実習生8人に対し，半構造化インタビューによる質的調査を行った。インタビュー調査は，いずれも一度きりで終わらせるのではなく，できるだけ長期にわたって継続的に追跡するようにした。そして，状況をより正確に把握するために，監理団体の元責任者，中国の労務輸出の仲介会社の担当者，技能実習生の日本語講師にもインタビューをした。対象者のプライバシーを考慮し，本論文では，関係者をローマ字で表記し，仮名を使用することとする。

インタビューは，基本的に中国語の標準語で行ったが，その中に方言が混じる場合もあった。各対象者に対して，初回のインタビューは対面式をとり，その後，補足インタビューを行う際は，対面式もしくは，面会が困難な場合は電話やスマートフォンアプリの通話機能を通じた非対面式を採用した。一人当たりのインタビュー時間にはかなりばらつきがあり，60分から長いものでは数回にわたり合計5時間以上かけたものもある。本論文に反映されているインタビューの内容は，筆者が中国語でテープ起こしを行った上，必要な情報を取り出し，日本語に翻訳したものである。

以下では，インタビュー対象者について，入国時の在留資格および研修・技能実習が終了／中止時の在留資格がそれぞれ異なるため，個人の状況に合わせて，「研修生」もしくは「研修生・技能実習生」「技能実習生」と表記する[12]。

表1　中国人研修生・技能実習生調査結果一覧

名前	性別	生年	学歴	出身地	技能実習			国内の職業		移動パターン
					期間	受入地	内容	前職	現職	
A	男	1984	中卒	遼寧省	2007年1月～2010年1月	長野県	農業	農業	小売業	国内移動—越境—帰国—都市へ移住
B	女	1986	大卒	山東省	2010年9月～2013年3月	福岡県	水産業	学生	主婦	越境—日本他地域へ移住
C	女	1977	中卒	黒龍江省	2004年4月～2007年4月	愛媛県	縫製業	家政婦	家政婦	国内移住—越境—帰国
D	男	1987	高卒	遼寧省	2008月9月～2009年6月	北海道	水産業	建築業	出稼ぎ	越境—帰国—第三国
E	女	1988	高卒	遼寧省	2009年10月～2012年10月	千葉県	肉加工業	靴加工	卸業者	越境—帰国
F	女	1987	中卒	遼寧省	2009年7月～2011年6月	北海道	農業	農業	農業	越境—日本他地域へ移動—帰国
G	男	1986	中卒	遼寧省	2008年1月～2011年1月	長野県	農業	農業	農業	国内移動—越境—帰国
H	男	1965	大卒	山東省	1998年9月～1999年9月	富山県	部品製造業	自動車製造	国際貿易	国内移住—越境—帰国—日本へ移住

初回のインタビューを実施した順番に，インタビュー対象者の属性をまとめると，表1のようになる。

3.2　インタビュー調査の結果

本節では，インタビュー調査の結果を踏まえながら，中国人研修生・技能実習生のトランスナショナルな移動の実態を模索する。以下では，移動のパターンによって4つのカテゴリーに分類し，存在論的移動に焦点を当て，各々の特徴を捉えて述べていく。なお，研修生・技能実習生の移動は様々な要素に制約され影響されるが，筆者が設定したカテゴリーは，ミクロな視点で各研究対象者のライフコースに現れる最も顕著な特徴を検討した上，分類したものとなる。また，後節で各事例を関連付けながら，横断的に考察していく。

3.2.1　出稼ぎ目的の成功

研究対象者がライフコースにおいて物理的移動から存在論的移動へ転換したり，存在論的移動が新たな物理的移動を促成したりする傾向がみられている。物理的移動は出世のための手段として活用されており，人生の達成感を生み出す源泉にもなるという感覚が多くの技能実習生に共有されている。特に，出稼ぎという物理的移動を通じて成功を収めたロールモデルが多く存在する地域では，出稼ぎはある種の出世の神話として信奉され，人生を転換する機会だとみられている。Aさん，DさんとGさんの出身地である中国遼寧省のX県[13]は，毎年大量の青壮年労働力を送り出している地域である。地元の若者の出県志向が高まり，連鎖移民が観察されている。出稼ぎは，中学校あるいは高校を卒業した後の進路の一つとみなされている。

X県は，少数民族の満族が集住する地域であり，人口の約7割が満族人となる。満族のほか，朝鮮族

が人口の一定の割合を占めている。監理団体の元中国人責任者によると，地元では，親族ネットワークを通じて，韓国への出稼ぎが多くみられ，2000年代に入ってから，韓国に次いで，日本へ出稼ぎに出る傾向が強くなってきた。県内から毎年およそ1000人程度の海外出稼ぎ労働者が出ており，連鎖移民には主に3つのルートがあるという。県内に在住する朝鮮族の親族ネットワークや同郷人ネットワークによる韓国への移動，本調査で対象とされた研修生・技能実習生の日本への移動のほかに，国内で複数の地域への出稼ぎに伴う移動も多く行われている。技能実習生の道を選んだ人にとって，日本へ行くというのは移動の選択肢の一つに過ぎず，必ずしも日本にこだわる理由があるとは限らない。その中の多くは，来日する前に，すでに国内の移動を経験しており，移動の試行錯誤を繰り返していた。

中学校を卒業してから，家の水稲の栽培を手伝っていたＧさん[14]は，まず国内の移動に挑んだ。Ｇさんの家は広州市の食料品卸業者と契約を結び，米線の原材料である米を高品質かつ低価格で提供することで，元々火の車であった家計が潤った。しかし，経済的な余裕を実感したのに対して，心の空洞化に襲われたＧさんは，出稼ぎを決めた。

> 20歳[15]でまだ家にいるなんて，一生不甲斐ないぞ。男ってさ，世界を見ないと。瀋陽や大連に遊びに行ったりしたけど，北上広[16]にまだ行ったことなくて，あんまりにも視野が狭くて世間知らずだね。

出稼ぎの目的が当初の「お金を稼ぐ」という経済的利得の追求から「自分を磨く」や「視野を広げる」という内面的進化の実現へ転換する傾向が表れている。同じくＸ県出身のＡさん[17]も技能実習に行くことを決断した時，似たような動機を持っていた。

> 実家は，地元で比較的裕福なので，経済的不自由を感じなかったけど，やっぱり一人前の男になるために，海外へ行って，視野を広げ，自分を磨きたかった。過酷な労働だと覚悟しながらも，それこそが意味があると思った。

しかし，たとえこのような理想を持って出稼ぎに出たとしても，現実に対してつねに迂回したり妥協したりしなければならない。Ｇさんは，広州で正規雇用の仕事に就けず，生活コストが実家より高かったため，出稼ぎ先で挫折を味わった。自力で大都市での生活を維持することすらできなかったＧさんは，広州から家に帰せざるをえなかった。その頃，ちょうどＡさんが日本への技能実習の手続きをしている時だった。Ａさんに刺激され，国内の出稼ぎで失った面子を挽回するために，Ｇさんは再び移動することに挑戦し，日本へ技能実習に行くことを決めた。ただし，Ｇさんにとって，受け入れ先の長野県は単なる移動先であり，国内か海外かが何を意味しているかまで考えなかった。「新世界に好奇心を持って，知人（Ａさん）がいるところがいいと思っただけだった」。

一方，苦労しながらも3年間の技能実習が終わり帰国したＡさんは，まず運転免許を取得した。「次の仕事が決まっていなかったけど，とりあえず将来に向けて準備をしたかった」。4ヶ月後，春の種まきが終わり，Ａさんは稼いだお金と以前の貯金を合わせて，約500万円を資本金として，瀋陽市で乳製品店を経営し始めた。時々，瀋陽の洋服工房で修業している妹の面倒を見たりする。

女の子だから，そんなに苦労しなくていい。できれば，僕が妹の分まで頑張って，妹はそのままで幸せになってほしい。僕が日本に行っていた間，両親の世話をちゃんとしてくれたし，妹にはとても感謝しているよ。

長男であるＡさんは，家族に対してつねに責任感を持って，自分がいくら辛くても，妹に苦労させたくないと考えている。このような男らしさは，お見合い相手の女性に好感を与えたらしい。「当時，妻は，海外出稼ぎで過酷な仕事に耐えられた私を頼りにできると思った」。帰国した2年後の2012年に，女性と結婚し，2014年4月に娘が生まれた。その後，Ａさんは，住宅ローンを組み，店の近くのマンションを購入し，両親を瀋陽市まで迎えた。

小さい頃からＡさんを人生のロールモデルとみなしていたＧさんは，技能実習が終了した後，Ａさんのように瀋陽には行かなかった。現在，Ｘ県で漢方薬材の栽培をしている。

家でまた水稲のことをしていいけど，周りから見て，やっぱり日本から帰ってきたから，同じことを続けると，進歩を見せないし，面子が立たないよ。薬材は，水稲より利潤が大きくて，将来さらに事業を起こすかもしれない。せっかく出稼ぎで成長してきて，前の生活と何らの区別がつかないと，意味がないじゃない。

本項で取り上げたＡさんとＧさんの事例から，移動する前に，現状が維持される限り経済的不自由が生じない人にとって，つねに人生が停滞している状態を打破しようとすることがうかがわれた。どこかへの物理的移動を通じて，「以前の自分とは違う」「成長し成熟する」「自分自身を昇華させる」というように理想の自分像に近づいていく。ここでの「どこか」は単なる移動先であり，必ずしも移動する主体の将来に関連する必然性があるとは言えず，存在論的移動に導くルートだと捉えられている。このプロセスにおいて，物理的移動から存在論的移動への転換が完成させられる。同時に，存在論的移動の達成から獲得した資源を利用して，新たな物理的移動を可能にする。Ａさんのように蓄積した経済資本を活用し，都市部に移住し起業するケースがあれば，Ｇさんのように地元に残り，同じ場所に留まり続けても，仕事の内容を変え，ライフコースにおいてさらなる進歩を遂げようとするケースもある。

3.2.2　結婚・出産と移動

技能実習生は，3年もしくは5年の在留期間が認められ，期間付きの滞留者というイメージが描かれている。だが，独身者の場合はより長期的な滞在を希望している（坂 2016: 58）。それは不法滞在や失踪問題を生み出す一方，合法的な移住策を練り上げることにもつながる。北海道で水産業の技能実習を受けたＤさんによると，外国人が集住する地域では，中国人が経営している中国物産店は情報交換の拠点となり，時には結婚相手を探す情報もある。店主はまるで斡旋ブローカーのように結婚移住を仕掛けている。

確かに，長期的な滞在を目指す技能実習生にとって，国際結婚移住は一つの有効な手段である。しかし，移動を移住に変える方法は様々であり，合法的な在留資格を持つ中国人と結婚して日本で家庭を築くことで，移住を図るケースもある。Ｂさん[18]はその実践者の一人である。

Ｂさんは，多くの中国人技能実習生と違い，大学の日本語学科を卒業し，比較的高学歴である。山東

省の農村出身のＢさんは，大学への進学を決めた当時を振り返ると，「他人から見て，私はすごくわがままだったね。うちは裕福でもないし，10歳年下の弟がいるし，生活費を稼ぐだけで，親は精一杯だった」という。大学を卒業する前，留学や就職など同級生たちの進路が決まる一方，まだ決まっていないＢさんはとても不安だった。長年の学生生活で，すでに家族に多大な負担をかけていたので，Ｂさんはなるべく早く自立して親に恩返ししたいと思った。大学の日本語の先生が，労務輸出会社で研修生の日本語講習を担当していたので，Ｂさんに技能実習生として出国する機会があると伝えた。近年，日本語を専攻する大学生が卒業した後，技能実習生として来日するケースが徐々に増えているという。Ｂさんのクラスでも，ほかに3人が来日した。

2010年9月，Ｂさんは福岡県の工場で水産加工の作業を始めた。

> 真白な帽子をかぶって，真白なマスクをかけて，真白なパッケージを詰めていた。私が詰めた竹輪は日本に留学している大学の同級生の食卓に現れるかもしれないと思ったら，大学に行った意味が見えなくなった。もともと同じ教室で勉強していたのに，みんなは上を目指して，なんで私だけがこんなことやっているのと思って，すごく落ち込んでいた。

しかも，このような悩みは，絶対に母国にいる家族に言えない。「両親に心配を掛けたくないし，弟を失望させたくない。彼は胸を張って友達に『僕のお姉さんは日本にいるよ』と言っていたから」。Ｂさんは家族との連絡がだんだん減り，ソーシャル・メディアも使わなくなり，同級生の近況を見ないようにした。

4ヶ月後，ベトナムからの研修生が来て，Ｂさんに日本語を教えてもらった。「彼女は日本語があんまりできないのに，将来通訳やりたいと言った。それを聞いて，私は自信がついた」。日本語能力があるため，Ｂさんは，休日に地元のコミュニティセンターで，外国人向けの日本語講習のボランティアをしていた。そこで，福岡県に転勤する中国人男性に出会って，交際し始めた。「技能実習が終わったら結婚する」と約束した交際3年目に，男性は人事命令を受け，埼玉県の本社に戻るようになった。将来について相談しあった結果，Ｂさんは男性と入籍して，技能実習を中止した。そして，一緒に埼玉県に引っ越した。

> 旦那は福建省出身なので，当時親にすごく反対された。だって，中国で結婚相手を探す時，南か北か実家はどこにあるかすごくみるでしょう。将来，どこに生活するかに関わっているからね。旦那は永住ビザを持っているから，私は配偶者ビザでずっと日本にいられる。ずっと日本で生活していきたいし，親を一生懸命説得した。中国で生活するなら，この結婚は絶対無理だと思うけど，外国で生活するからこそ，親の同意を得られた。

2015年9月，Ｂさんは女の子を出産して，母親が孫娘の面倒を見に来た。その後，主人の母親も来日した。母国で一度も会ったことのない二人の母親は，異国の日本でやっと会えた。

> 結婚してからずっと専業主婦をやっていたけど，子どもを産んで，粉ミルクやオムツなどのベビー用品に関心を持ち始めた。日本製商品が中国人の中で大人気なので，オンラインショップを開い

て，代購[19]をしている。それで，中国にいる多くの人とやりとりできるし，昔の友人や知り合いからの注文もあるよ。

休日は，家族で旅行したり，近くの中国人家庭と食事会を開いたりするという。

私にとって，代購は仕事としてではなく，むしろ趣味でやっている。将来は，やはり少なくとも言語を活かした仕事に就きたいね。翻訳とか，通訳とか。でも，子どもがまだ小さいから，なかなか目を離せなくて，今はちょっと難しいね。3歳になったら，保育園に預けて，外に出て仕事をしたい。

Bさんのように，結婚を通じて日本への移住を成功させた技能実習生は少ない。多くの農村出身の技能実習生にとって，日本へのトランスナショナルな移動は，経済資本や社会関係資本をより効率的に蓄積する方法であり，帰国した後都市への移住に向けて安定的な基盤を整える準備である。特に，既婚者にはこの傾向が比較的顕著である。

黒龍江省の農山村出身のCさん[20]は，技能実習生として来日する前に，すでに国内の移住経験を持っていた。19歳で瀋陽に出稼ぎに出て，家政婦の仕事に就いて転々とした2年目に，ようやくある家庭で長く勤められるようになった。その後，雇い主が住んでいるマンションの警備員と結婚し，翌年に長女を出産した。結婚してから，瀋陽出身の夫の家で暮らしていたが，農村出身のため，義理の母の歓心を得られず，出稼ぎで来た上，経済面では夫の両親に頼りすぎているという状況であった。義理の母との緊張関係を緩和するために，Cさんはまず経済的な自立を図ろうとした。ちょうどその頃，家政婦の仲介会社が海外への仲介業務を展開し始め，Cさんはそれを経由し移動の機会を掴んだ。子どもが3歳になった2004年4月に来日し，愛知県岐阜市にある縫製工場で働き始めた。

中国に子どもを残していたCさんは，娘を思い出すと申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

3歳から6歳まで，大切な成長する時期なのに，ずっとそばにいてあげられなかったです。家に帰ったら，娘はもうそろそろ小学校に入る年になったのです。よく電話で話したり，夫が送ってくれた写真で顔を見たりしたけど，3年ぶりに空港に迎えにきた娘を見た瞬間，それまで正解だと信じていた私は，後悔し始めました。

Cさんが帰国した2007年までに，家政婦の市場が大きく変容していた。一人っ子世代の結婚および出産により，産褥期の世話をする専門性の高い家政婦が求められるようになった。普通の家政婦より，待遇が手厚く，仕事の条件がいいという。日本で稼いだお金で夫と起業するか，家政婦として復帰するかと悩んだ結果，得意の家政婦の仕事を再スタートすることになった。家政婦の仲介会社は高級マンションの管理側と手を組み，「執事サービス」を打ち出し，マンションの住人に家政婦を派遣する事業を展開し始めた。海外経験があり，礼儀作法が正しいと評判になったCさんは，カリスマ家政婦として活躍している。

「正直に言って，日本で稼いだお金は当時の私にとって大金でしたが，今の収入と比べて，そうでもなくなったのです。物価も高くなり，金銭的な感覚がだいぶ変わってきました」。Cさんの夫は警備員

の仕事をやめて，高級マンションの近くにスーパーを開いた。2013年に夫の両親の家から出て，住宅ローンを組んで，中古住宅を購入した。

> 昔住んでいたところは，やっぱり学区ではないから，娘にいい学校に行かせられなかったです。いまは中学校3年生で勝負です。勉強の環境を整えて，いい高校に行かせて，そしていい大学に入ってほしいです。

日本から帰ってきてから，「やっと瀋陽に根ざして，都市戸籍[21]にもなったし，裕福になるまではまだ道が遠いけど，少し余裕が出た気がする」というCさんは，夫の両親との関係にも家族の将来にも自信を示した。

本項で取り上げたBさんとCさんの事例から，移動することは，外国への越境移住を図る手段や，国内での移住を固める方策としても利用されていることがうかがわれた。ここでの移動において，日本への物理的移動はもちろん，同時に生み出される存在論的移動が看過されてはならない。Bさんは，同級生との比較で生じた落ち込みや立ち遅れ感を，結婚や出産などのライフコースの節目をクリアすることで解消した。一方，Cさんの場合，移動で蓄積した経済資本で自分自身を証明し，義理の両親に認められた。こうして，異郷人であった彼女は，移住を安定化させ，「やっと根ざした」と実感した。

3.2.3　ビジネスと起業による移動経験

技能実習生の移動は，通常「中国—日本—中国」というパターンが想定され，技能実習が終了した後，いったん日本を離れなければならない。しかし，技能実習を通じて，新たな接点を作り，日中間を行き来するケースが多くみられている。例えば，技能実習生は，再び「技能実習」の在留資格で日本に入国することができないが，日本企業は，人材を確保するために，技術者の条件を満たした技能実習生に特別な措置をとっている。元技能実習生は，企業を経由して技術者として就労ビザを取得し，再度入国を果たすことが可能である（坂 2016）。このように，異なる在留資格を申請することで，再び来日した元技能実習生が筆者の調査に現れた。

瀋陽出身のHさん[22]は，吉林省長春市にある国営自動車メーカーで勤務していた。企業のプロジェクトで，1998年9月に研修生として富山県の自動車製造工場に派遣され，1年後帰国した。「エンジニア」の職階昇進を評定されるのは，最低「大学」の学歴が必要となるため，翌年に留学ビザで再び来日し，九州にある大学の工学部に入学した。大学在学中，中国国内の貿易会社と連携して，佐賀県の陶磁器を国内に売り込もうとした。

大学卒業後，貿易に関連する会社を立ち上げ，日中間でビジネスをすることにした。妻と娘は，来日する願望がないため，両親に批判されながらも，長年別居生活が続いた妻と離婚した。2009年に日本人女性と結婚し，妻の弟もHさんのビジネスに参入しているという。

帰国しない理由について，以下のように述べた。

> 日本にいる間に国内の環境がだいぶ変わって，僕にとってはもう追いかけられない世界になった。企業内部の変革や人事異動もあり，かつての人間関係は切れてしまったり疎遠になったりしたことが多い。もし帰国して事業を興すなら，せっかく日本で作った人脈が維持できなくなるかもしれな

い。それに比べて，日本とのつながりをもっと活用すれば，より大きなスケールでビジネスが展開できるだろう。

ビジネスが日中をつないで，移動のプラットフォームを提供する。日中を行き来するのは，人だけではなく，人が駆使する金銭，情報，資源でもある。Hさんが実際に頻繁な物理的移動を行わなくても，国際貿易のビジネスに従事することにより，日中を行き来する移動の主体にもなる。帰国したEさん[23]も同じである。

Eさんが千葉県で技能実習を受けていた時，国内にいる両親とよく日本の生活情報やビジネス機会などについて意見交換をしていた。「お金を稼ぐために日本に行ったんじゃなくて，自分の中では，もっともっと日本につながりたい。日本の生活スタイルに憧れていた」。

帰国した後，家族で起業して，東北地域最大の集合貿易市場で日用品の卸販売を始めた。滞日中，両親とよく情報交換していたため，父親はEさんが帰国する前に，すでに製造業のメーカーと打ち合わせをして，取引関係を確定した。それで，Eさんが帰国して間もなく起業ができたのである。

日本での技能実習を通じて，考え方が変わった。最初は，納得できなかったり，適応できなかったりすることが多かったけど，職場で直面した衝撃から，日本に対する理解が深まった。そのおかげで，日本との関係を持ち続けようと思った。今の考え方は，時々日本式だったり，時々中国式だったりするのよ。その切り替えがカギかな。

本項で取り上げたHさんとEさんの事例から，研修・技能実習が終了した後，日本と中国を跨いで移動し続ける2つのパターンがうかがわれた。この2つのパターンは，いずれも頻繁な物理的移動を伴わなく，ビジネスを通じて日中を媒介するのである。資源を越境させることや思考モデルを転換することによって，移動の様態が拡張された。実際の物理的移動がなくても，象徴的な意味で日中を自由自在に行き来したり媒介したりすることができる。

3.2.4　移動し続ける滞留者

技能実習生は，永住を前提としない制度で入国する非熟練・半熟練労働者とみなされている。日本社会では一時的な「滞留者」としか位置付けられず，地域社会から孤立され隔離される事例が枚挙にいとまがない。その中で，自ら技能実習を中止し，受け入れ先からこっそりと逃げ出した人が，日本社会に隠れたり潜んだりする非正規滞在者になる。

Fさん[24]は，2009年7月から2011年6月まで，北海道で農業実習をしていた。2011年3月の東日本大震災時，東北地方の技能実習生は大量に帰国したと聞いたが，受け入れ地域の日高では，被災がなく，帰国者もいなかったため，Fさんはしばらく様子を見ようと思った。震災時，東京で中国料理店を経営している遠縁の親戚と連絡が取れ，情報交換や安否報告をしていた。その時，親戚に「東京にきて，うちの料理店で働いたらどうだ」と誘われて，2011年6月に密かに東京に逃げ出した。

その時，あと1年間で帰国するけど，私はもうちょっと日本にいたかった。親戚のおばさんも元々出稼ぎで日本に行って，高級レストランで料理長を務める中国人男性と結婚して，日本に長くいら

れるようになった。私は日本人と結婚するつもりはなかったけど，もうちょっと稼ぎを得たら帰国しようと思って，技能実習の低い給料に光が見えなくて，時給のいい東京に行ったの。

車で食材を仕入れた時，他の車とぶつかり，警察が来た。「おじさん（親戚の夫）が車を運転していたから，主に彼が対応していたが，やりとりで私が中国人だと知って，『在留カードを見せてください』と警察に言われた。『持っていない』と伝えたら，料理店までついてきた」。Ｆさんは不法就労で逮捕されて，東京入国管理局で2週間過ごした後，中国へ強制送還された。

「技能実習」の在留資格には就労制限があり，「指定書記載機関での在留資格に基づく就労活動のみ可」となる。つまり，研修生・技能実習生は，複数機関での就労もしくはアルバイトをすることができないのである。そのため，Ｆさんは「不法就労」の理由で逮捕されたのである。しかし，Ｆさんの認識では，受け入れ先から逃げ出したのが「不法滞在」だと思い，料理店で働いていた時，「ずっとそれを隠そうとした」。

Ｆさんのような滞留者が，日本社会で移動し続けている。帰国せざるをなかった場合にも，また滞留者として第三国に移動したりすることがある。Ｄさん[25]はその一人である。

Ｄさんは，2008年9月から2009年6月まで，水産業研修生として，北海道で水産加工作業をしていた。技能実習中，工場の管理者と争いになり，1年足らず帰国してしまった。技能実習に行くことを決めた動機について，以下のように述べていた。

どうせ出稼ぎに行くなら，もっとお金を稼げるところに行きたいだろう。募集要項に「時給780円」と書いてあって，それは地元の町工場でまるまる1日働いても，なかなか手に入れられない金額だ。日本で3年間稼いだお金は，地元では10年，20年かかっても，必ずその分を稼げるとは限らない。

Ｄさんは日本に渡った当初から，新しい職場の環境に慣れなかった。受け入れ先の工場で管理者との口論が頻発し，「態度が悪いとか，マニュアルに沿って作業していないとか，相手は言いがかりをしたかっただけだろう」という。一方，同じ工場で働いている福州出身の中国人男性は，管理者に班長に選ばれ，Ｄさんを含めた4人の中国人研修生の作業指導や進捗報告を担当するようになった。

南蛮子（南方人に対する蔑称）は打算的だ。僕らを監視して，日本人に告げ口をする。平気で媚を売ったり，歓心を買ったりするなんて，まったくみっともない。中国人の面子が潰れる。

このように，Ｄさんは受け入れ工場の日本人管理者にも中国人上司にも不快感を覚え，彼らを敵視するようになった。職場での葛藤がエスカレートして，「ケンカして，結局帰った」とＤさんが淡々と触れた。ただし，「結局帰った」というのは，Ｄさん自らの願望なのか，強制送還されたのかは不明である。

Ｄさんには，結婚を前提で長く交際していた彼女がいた。日本から帰ってきたら結婚すると約束したが，予定より早く帰国したので，結婚するための費用が十分用意できなかった。「式を挙げられなくても，とりあえず結婚証書をもらった」。その後，夫婦で一緒に温州市に行って，洋服生産の工場で働き

始めた。

2015年1月に，妻の妊娠が分かり，2月に一緒に地元に帰った。Dさんは，地元で育児をしながら零工（臨時雇いの仕事，農作物の収穫や農家レストランの店員など）を続けていた。「子どもが大きくなったら，親に預けて，また出稼ぎに行く」。

2016年11月に，筆者がDさんに電話すると，妻が「旦那はコック見習いでもう10月に外国に行ったよ。半年後，私と息子もついて行くかもしれない」。Dさんは滞留者として移動し続けている。

本項で取り上げたFさんとDさんの事例から，研修生・技能実習生はライフコースにおいて，技能実習をやめたりやめざるをなかったりしても，滞留者として移動し続ける実態がうかがわれた。このような移動の継続においては，物理的移動を実践しながら，ライフコースの異なる段階における存在論的移動の目標が改めて設定されるのである。「もうちょっと稼ぎたくて，時給の高い東京に行く」Fさんは，帰国を前提とする滞留者像を描いたのに対して，「再び外国に出稼ぎに行って，妻と息子を呼び寄せようとする」Dさんは，滞留者から移住者へ変わる決心を示した。

4.　考察

4.1　トランスナショナルな移動

技能実習生のトランスナショナルな移動において，出身地社会，目的地社会およびそれらを超えた社会空間で，多数のネットワークが形成されている。彼・彼女たちのトランスナショナルな移動は，人的移動だけではなく，モノ，カネ，情報・文化といった資源・情報の越境も伴っている。多種多様な資源がつなぐトランスナショナル・ネットワークは，技能実習生のライフコースの各段階で異なる役割を果たしており，彼・彼女たちの物理的移動と存在論的移動に影響を与えている。

日本への出稼ぎ移動の意志を固めた背景には，来日した成功者といったロールモデルの存在がある場合がある。特に，連鎖移民がみられる地域では，AさんとGさんのように，出稼ぎで成功を収め，継続的にロールモデルを生み出している。出稼ぎ願望を触発する他の要因として，帰国後の生活改善，職場の移動，社会的地位の上昇などが挙げられる。

中国の生活現状に希望を見出せず，不満が募る中，何とかして人生を変えようとして，転機を与えてくれる場を日本に求めてくる彼・彼女たちの心理が映し出されている。Bさんのように進路に迷う人もいれば，Cさんのように経済的な自立を通じて，家庭内の人間関係の改善を図る人もいる。また，Dさん，EさんとGさんのように，国内の働く経験に失望を覚え，海外に希望を見出そうとする事例もある。

帰国した後，送り出し社会への再適応に関しては，研修生・技能実習生の場合，出国時点ですでに送り出し社会での文化を身につけているので，帰還後送り出し社会での生活には違和感を覚えることはないと想定されている。一方，日本での生活に適応しきって「母国の様々な側面を改善すべきだと感じている」という人もいた。例えば，Aさんのように，日本の食料品の管理方法を学び，店の経営に適用する事例がある。また，Cさんの事例からわかるように，研修・技能実習で身につけた礼儀作法を現在の仕事で生かしたケースもある。しかし，送り出し社会に適応できない点として，Hさんは「人間関係の再構築」を挙げている。

技能実習生は，帰国した後にも，日本社会とのつながりを保っている事例が筆者の調査ではいくつかある。Hさんのように，かつての研修先で知り合った人を社会関係資本として蓄積し，自らの起業に役立たせる。また，ビジネスを通じて日本社会とのつながりを改めて作ろうとするGさんの事例もある。

研修生・技能実習生の帰国は，そのまま日本社会との関係の終結ではない。むしろ，受け入れ社会における様々な関係を改めて送り出し社会に持ち込み，そのことがさらなる紐帯を作っていく。そして，こういった紐帯は，決して一方向にのみ働くものではない。前述したＨさんの事例では，起業にあたって，義理の弟である日本人の親族から援助をもらっているという。トランスナショナル・ネットワークが送り出し，受け入れ社会の双方を取り入れることにより，新たな産業を作り出している。

帰国後の交際や結婚状況をみると，研修生・技能実習生としての滞日経験が，交際相手に好印象を与えるＡさんとＥさんの事例がある。研修生・技能実習生の若年化により，その中の多くは，来日する時点で未婚であり，海外出稼ぎを通じて，一定の経済基盤を整え，結婚相手としての価値が高まる。

滞日経験は，確かに研修生・技能実習生の生活世界を広げ，送り出し社会への帰還は彼・彼女たちに従前の生活とは異なる生活をもたらしている。起業者や大都市への移住が多く見られている限り，それは約束された成功と活躍する舞台を広く与えるものとなっている。

滞日している間に，急速な発展を遂げた中国は，研修生・技能実習生にとって，新たな市場と就労の機会を提供している。また，研修生・技能実習生にとっての移動と帰還は，送り出し社会と受け入れ社会の変動の中で，様々な選択可能性を示している。こうして，トランスナショナル・ネットワークが拡張していく。

4.2　存在論的移動への影響

大多数の研修生・技能実習生の意識では，日本への出稼ぎは，「お金を稼ぐ」という前提に立つものであるとともに，社会関係資本を蓄積するという目的を伴うものである。帰国を前提とする技能実習生にとって，日本の地域社会と深い絆を築くことより，持ち帰れるものを先に入手するのが効率的であろう。確かに，日本語の上達や地域社会で作った人脈や築いた信頼関係が，よりスムーズな実習生活を送るのに有益であるが，そのために費やされたエネルギーが大きいため，技能実習生が自らそれを回避しようとするかもしれない。代わりに，職場で学んだ品質管理や仕事に対する取り組み意識が，帰国後の就職に建設的であり，それらを熱心に勉強する技能実習生が多い。

Ａさんが帰国した後，乳製品店を開いたのは，受け入れ先で農産品の加工作業に従事した時，商品に対する品質管理に感心し，それを学んで活用しようという考えからであった。より新鮮な乳製品を提供することで，ライバルと差別化を図り，激しい競争で生き抜いたのである。また，Ｃさんは家政婦の仕事に復帰したが，待遇が手厚い高級マンションで働けて，日本での経験を生かし，礼儀作法が正しいと評判になった。Ｅさんも職場で直感した衝撃から，日本に対する理解が深まり，日本式の考え方の形成につながった。このように，知見や技術，思考モデルを身に付けて持ち帰ることで，ライフコースの次の段階に寄与する。技能実習生は一時的な滞在者として自分自身のためにいかに便益を図るかがうかがわれた。

社会関係資本を蓄積する方法は様々であるが，インタビュー調査では，日本社会で起業し一定の成功を収めた人たちが，母国でさらなる発展を目指して，新たな事業展開を仕掛けている状況が示されている。日本人家族を持つＨさんの場合には，永住権を持っての再移住であり，子供や家族を日本に残して遼寧省で新たな事業を始めるために，日本と中国とを行き来しているという。こうしたケースは，中国社会が発展途上にあって，多くのチャンスを海外在住者に提供し始めている今日，増える傾向にある。また，定住した後，母国とのつながりを生かして，ビジネスを展開しているＢさんの例もある。オンラ

インショップを経営しているＢさんにとっての市場は，日本における70万人の在日中国人のそれではなく，むしろ母国の14億の市場の方である。Ｂさんにとっては，将来，日本と中国の狭間にあって，それらをつなぎ，隙間を埋める形での事業展開が最も有利な形であろう。

しかし，ＢさんとＨさんは，今回のインタビュー対象者の中では例外的な存在であるため，彼・彼女たちの展望は，一般の研修生・技能実習生では通用しない。インタビュー調査からは，多くの研修生・技能実習生は，「小富即安」[26]の意識を持っていることがうかがえる。それは，富に対する追求だけでなく，自己に対する要求にも反映されている。彼・彼女たちにとっての成功は，ＡさんとＥさんのように，大都市で起業することであり，Ｃさんのように，いい給料をもらって，憧れの富裕層に接触できる仕事につくことである。もしくはＧさんのように，同じ農業に従事するとしても，栽培する農作物は米から高級漢方薬材にレベルアップすることである。海外経験を持ち，視野を広げたとしても，彼・彼女たちの将来への展望は，出身階層や生活環境に制限されている。

一方，研修・技能実習を中止し，「失敗」したＤさんとＦさんは，将来に対して，異なる態度を示している。Ｄさんは悔しさを覚えながら，再び海外出稼ぎに行き，家族での移住を目指している。それに対して，Ｆさんは，地元に戻り，主人の手伝いをしながら，家庭生活に重心を置いている。「失敗の経験」は，彼・彼女たちを人生の異なる方向に導いている。

4.3　物理的移動と存在論的移動の相互転換

技能実習生のライフコースにおいて，物理的移動と存在論的移動のどちらか一方だけが経験されるのではなく，この2つの移動がつねに絡み合って交錯している。そして，どちらか一方が先行して，もう一方が随行するという明確な発生の順番がつけられない。物理的移動と存在論的移動はつねに相互促成・相互補完を繰り返し，相互に転換する可能性がある。

物理的移動と存在論的移動は，必ずしも対応しないにもかかわらず，両者の間に相互転換のメカニズムが形成されている。この2つの移動をリンクするのは経済的資本・人的資本・社会関係資本である。例えば，Ｄさんは技能実習を選んだ理由について，「日本で3年間稼いだお金は，地元では10年，20年かかっても，必ずその分を稼げるとは限らない」という。すなわち，3年間の技能実習という物理的移動を通じて，より迅速に経済資本を蓄積することで，元々10年か20年後の目標を早く達成させるのである。いうまでもなく，人生の目標を早く達成しようとする感覚は，「現状よりよい方向へ向かう」というニュアンスがあり，存在論的移動となる。また，前述したＡさんとＧさんの事例にも同様な物理的移動と存在論的移動の相互転換がみられている。

また，存在論的移動という感覚は，本人の発展に限って生み出されるのではなく，自分と親密関係にある人にも投影されている。例えば，Ｃさんは，娘のために，「勉強の環境を整えて，いい高校に行かせて，そしていい大学に入ってほしい」という。子どもの教育に投資して，いい高校やいい大学に行かせることで，人的資本を持たせるのである。こうして，子どもの存在論的移動の達成に拍車をかける。自分の利益と緊密に関わる人の存在論的移動は，自分の存在論的移動に強く影響することを見逃してはならない。すなわち，存在論的移動は，個人だけではなく，家族や利益共同体にも共有される感覚である。

さらに，物理的移動の主体が多様化しており，社会関係資本の越境は人間の物理的移動を代替し，存在論的移動の形成に働きかける。例えば，国際貿易を展開しているＨさんは，実際に頻繁に日中間を行

き来していないにもかかわらず，自ら所有する経済資本や社会的ネットワークを越境させることにより，日本と中国をつなぐ媒介役を果たしている。M・マクルーハンが主張した人間拡張の原理[27]に基づいて考えると，人間が所有する社会関係資本は，むしろある種のメデイアとして，人間の移動可能性を拡張する。社会関係資本は人間によって駆使され，人間を代替し移動を経験するのである。

ついで，技能実習生のトランスナショナルな移動の前提条件となる資金調達は，社会的ネットワークから生じる互酬性と信頼性を反映している。インタビュー調査では重点をおいて検討されなかったが，技能実習生は出国のための斡旋料，手数料，保証金などの高額な費用を調達するために，親戚や友人から借金するケースが少なくない。元監理団体の責任者によると，連鎖移民がみられる地域では，貸し手の多くは研修生・技能実習生としての滞日経験者である。彼・彼女たちは，経済的余裕を持つ上，自らの移動経験により，日本へ出稼ぎすれば，返済可能性が見込まれると判断するのである。まさに，移民の先駆者と後続者はバットンタッチして，移動を継続するのである。

5.　おわりに

5.1　結論

本稿では，トランスナショナルな移動を経験する中国人技能実習生のライフコースに着目し，ハージが提唱した存在論的移動のあり方に焦点を当てて，8人の研究対象者に対するインタビュー調査の結果を分析してきた。結論として，以下の3点があげられる。

第1に，技能実習生の移動パターンは，社会的要因と個人的要因に大いに制限されるにもかかわらず，多様に展開している。彼・彼女たちの移動は，単純に「来日—帰国」という制度上に規定されたパターンにとどまらず，より複雑化している。彼・彼女たちは，国際もしくは都市移住者として，移動を継続している。

第2に，技能実習生のライフコースにおいて，トランスナショナルな社会的ネットワークが形成され，社会資本が蓄積されることで，移動の能動性と可能性が高まる。また，彼・彼女たちは物理的移動だけではなく，存在論的移動をも経験し，それがさらなる移動を促している。物理的移動と存在論的移動は，人的・経済的・社会関係資本を経由し，相互に転換しうる。

第3に，グローバリゼーションが進展している中，人々の存在論的移動は彼・彼女たちの物理的移動を促す要因の一つとなる。しかし，存在論的移動は実際に物理的移動を行わない人にも共有される感覚であるため，必ずしも物理的移動に導くとは限らない。存在論的移動はいかに物理的移動を促成するのか，ライフコースにおいてどのような意義があるのかについては，さらに検討する必要がある。

本研究は，今まで日本社会において，外国人労働者と位置付けられていた技能実習生のライフコースにおける移動の可能性と能動性に注目して，質的研究を行い，彼・彼女たちの移動の実態を明らかにしようとした。技能実習生を実質的な国際移住者と捉えて分析して明らかにしたこうした移動の特徴は，トランスナショナリズムの理論的視点に基づく他の移民のケースにも共有される可能性がある。とりわけ，移民のライフコースを分析する際に「存在論的移動」という概念に着目することの有効性が示された。

5.2　今後の課題

近年，新規で来日する中国人技能実習生が減りつつある。一方，日本の受け入れ政策の緩和により，

その他の経緯で来日して就労する中国人が増えていく。出稼ぎ希望者の移動ルートが多様化しており，技能実習生の予備軍は分散されている。例えば，翻訳・通訳の在留資格を取得し，デパートや電気屋，ドラッグストアで中国語対応として働く中国人労働者はいる。こういった職場は，技能実習生の3K職場よりは労働環境がよいため，出稼ぎ労働者にとって魅力的である。こうして，日中間に新しいトランスナショナルな移動の傾向が生み出されている。それがこういった国際移住者の存在論的移動にどのような影響をもたらすのかは，今後の課題として注目する必要がある。

注

1 法務省「在留外国人統計（旧外国人登録統計）統計表」，http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html, 2018年5月1日最終閲覧。

2 「技能実習1号イ」「技能実習1号ロ」「技能実習2号イ」「技能実習2号ロ」の合計数である。在留資格「技能実習」は，まずその活動内容から1号（修得）と2号（習熟）の区分が設けられ，さらに，それらの1号と2号は，それぞれ企業単独型「イ」および団体管理型「ロ」の2系統に分けられている。したがって，在留資格「技能実習」には2種類・2タイプの計4つの活動が含まれている（JITCO 2014: 8–9）。

3 入国支援とは，入国管理局に提出される技能実習生の入国・在留等に係る申請書類について，JITCOが事前に点検を実施することを指す。

4 「JITCO業務統計・調査報告」，https://www.jitco.or.jp/ja/jitco/statistics.html, 2018年5月1日最終閲覧。

5 中国語で表現されるカテゴリーで，英訳するとForeign Labour Servicesとなる。すなわち，出証権（直接労務輸出経営権）を持つ企業が，海外の政府機関，企業，雇用主との間に結んだ労務派遣契約に基づき，各種の労働者を派遣することを指す。国家の外貨収入を増やし，国際経済技術交流を拡大するための高いレベルの対外経済活動であり，中国の対外経済貿易活動の重要な一部を成している（上林 2015: 246–48, 267）。

6 2016年11月の国会において，2020年東京五輪の会場建設に向けて，建築業での技能実習生の滞日期間を3年から5年に引き上げることが承認された。5年間の滞在とは，国際的には「短期移民」ですらなく，長期移民として他の受け入れ国では分類されうる（小井土・上林 2018: 470）。

7 環流型移民とは，移民が自らの移動する能力を重視し，1つの地点に定まったり2つの地点を行き来したりするのではなく，さらに積極的に他の地点と結びつき，複数の地点を巡り，循環して移動する現象を指している。

8 中国香港のテレビ局鳳凰衛視が2017年6月から7月に放送したドキュメンタリー番組シリーズ「逐夢彼岸　中国新移民」の内容により，筆者がまとめたものである。

9 JITCOの統計によると，2016年の失踪者数は3222人になり，実際に行方不明になった技能実習生はこれよりはるかに多い。その一部は難民申請を通じて，日本での長期滞在を図るという（「JITCO業務統計・調査報告」，https://www.jitco.or.jp/ja/jitco/statistics.html, 2018年5月1日最終閲覧）。

10 連鎖移民とは，血縁や地縁という同類的つながりを利用して次々と人が移動して，結果的に地域間に紐帯が生まれる現象という。外国人技能実習生の場合，送り出し社会と受け入れ社会の間に，「送り出し→受け入れ→一定期間の滞在→帰国」といった循環のパターンが恒常的に成立していることを指す（吉原ほか 2013: 306）。

11 中国語では，「読万巻書，行万里路」という。

12 2010年7月改正入管法が施行する前に，在留資格「研修」で来日し，日本滞在年数1年未満は「研修生」とし，1年以上は「研修生・技能実習生」とする。改正入管法の施行後に在留資格「技能実習」で来日した人は「技能実習生」と表記する。なお，対象者全員をトータルに指す時に，「研修生・技能実習生」と表記する。

13 中国ではじめての少数民族自治県。近年，労働力の流出による農業の荒廃が進んでいるが，筆者が2016年5月に訪ねた時，地域振興として打ち出されたグリーンツーリズムの発展を実感した。地元では満族習俗や民族文化を再現する民泊と農家レストランが観光客を県内に招致する要素となる。

14 2016年8月28日にX県でインタビューを実施した。その後，通話機能のあるチャットアプリWechatを通じて事実確認と追跡調査を数回行った。

15 実は19歳だった。中国東北地域では年齢を数える時，実際の年齢にさらに1歳を加える。

16 北上広とは，北京，上海，広州の略称である。経済発展が進み，若者たちが憧れる大都市の象徴である。

[17] 2015年8月7日，2015年8月25日，2016年8月23日，2017年8月20日に瀋陽市でインタビューを実施した。

[18] 2016年6月18日，2016年9月12日に埼玉県でインタビューを実施した。また，Wechatを通じて事実確認と追跡調査を数回行った。

[19] 相手が指定する商品を購入し，国際郵便で中国までに送る。報酬として手数料を徴収する。直訳すれば，「（相手の）代わりに（商品を）購買する」ということ。

[20] 2016年8月17日に瀋陽市でインタビューを実施した。その後，Wechatを通じて事実確認と追跡調査を数回行った。

[21] 「非農業戸籍」の誤った表現。中国の戸籍制度は，設立当初から人口の移動を制限する目的があった。「農業戸籍」，「非農業戸籍」に分けられるが，都市出身者は非農業戸籍なので，「都市戸籍」とよく言い間違えられる。

[22] 2016年10月12日に東京都でインタビューを実施した。その後，電話で事実確認を行った。

[23] 2016年8月23日に瀋陽市でインタビューを実施した。その後，Wechatを通じて事実確認と追跡調査を行った。

[24] 2016年8月25日に瀋陽市でインタビューを実施した。その後，Wechatを通じて事実確認と追跡調査を行った。

[25] 2016年8月20日に瀋陽近郊でインタビューを実施した。その後，電話で追跡調査を行った。

[26] 大した富を追求せず，少し余裕があれば，それに満足する，という意味。

[27] メディアは身体を拡張すると主張する原理である。メディアは「対象との媒介」というよりは，むしろ身体の一部であり，メディアの発明によって肉体器官が延長もしくは拡張されるという。例えば，望遠鏡は眼の拡張，車は足の拡張などが挙げられる（McLuhan 1964＝1987）。

参考文献

浅野慎一編，2007,『日本で学ぶアジア系外国人　研修生・技能実習生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版.

Castles, S. & Miller, M.J., 2011, *The Age of Migration*, 4th edition, The Guilford Press.（＝2014, 関根政美・関根薫監訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会.）

Faist, T,. 1998, Transnational Social Spaces out of International Migration: Evolution, Significance and Future Prospects, *Archive Europeenne de Sociologique*, 39: 213–47.

外国人研修生権利ネットワーク編，2009,『外国人研修生時300円の労働2―使い捨てをゆるさない社会へ』明石書店.

「外国人労働者問題とこれからの日本」編集委員会，2009,『〈研修生〉という名の奴隷労働―外国人労働者問題とこれからの日本―』花伝社.

Hage, Ghassan, 2005, “A Not So Multi-Sited Ethnography of a Not So Imagined Community,” *Anthropological Theory*, 5（4）: 463–75.（＝2007, 塩原良和訳「存在論的移動のエスノグラフィ―想像でもなく複数調査地的でもないディアスポラ研究について」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代移民研究の課題』有信堂高文社，27–49.）

広田康生・藤原法子，2016,『トランスナショナル・コミュニテイ―場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社.

法務省，2017,「在留外国人統計（旧外国人登録統計）統計表」，法務省ホームページ（http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html, 2018年5月1日最終閲覧）.

馮偉強，2012,「出稼ぎ労働者の中国と日本における社会的ネットワークの形成」『日中社会学研究』第19号，123–41.

————，2013,「中国人研修生・技能実習生の日本語習得とニッポン」『愛知大学国際問題研究所紀要』第142号，153–81.

梶田孝道，2002,「日本の外国人労働者政策―政策意図と現実の乖離という視点から」梶田孝道・宮島喬編『国際化する日本社会』東京大学出版社.

上林千恵子，2015,『外国人労働者受け入れと日本社会　技能実習制度の展開とジレンマ』東京大学出版会.

葛文綺，2007,『中国人留学生・研修生の異文化適応』渓水社.

岸本和博，2015,『外国人技能実習生受入れ実践ガイド―入管手続と協同組合作り』明石書店.

小林真生，2013,「地域社会を通じて見た外国人技能実習制度―北海道稚内市の事例を中心に」吉原和男編『現代における人の国際移動　アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会，105–24.

小井土彰宏・上林千恵子，2018,「特集『日本社会と国際移民—受入れ戦争30年後の現実』によせて」『社会学評論』Vol. 68（4）, 468–78.

駒井洋，2016,『移民社会学研究—実態分析と政策提言1987–2016』明石書店.

公益財団法人国際研修協力機構編，2014,『外国人技能実習生・研修生の入国・在留手続Q&A　第4版Ⅱ』公益財団法人国際研修協力機構教材センター.

公益財団法人国際研修協力機構，2018,「JITCO業務統計・調査報告」，国際研修協力機構ホームページ（https://www.jitco.or.jp/ja/jitco/statistics.html, 2018年5月1日最終閲覧）.

Levitt, P., and N. Jaworsky. 2007. “Transnational migration studies: Past developments and future trends.” *Annual Review of Sociology* 33: 129–56.

Levitt, P., and S. Khagram, 2008, “Constructing Transnational Studies”, P.Levvit and S.Khagram eds., *The Transnational Studies Reader: Intersection & Innovations*, Routledge, 1–18.

McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill.（＝1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論—人間の拡張の諸相』みすず書房.）

奥田道大，2004,『都市コミュニティの磁場—越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東京大学出版会.

Portes, A., Guarnizo, L.E. and Landolt, P., 1999, “The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field”, *Ethnic and Racial Studies*, 22: 2, 217–37.

坂幸夫，2016,『外国人単純技能労働者の受け入れと実態—技能実習生を中心に』東信堂.

塩原良和，2017,『分断と対話の社会学—グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会.

嶋崎尚子，2008,『ライフコースの社会学』学文社.

多文化共働プログラム，2006,「外国人従業員受入れに関する調査報告書～外国人研修生・技能実習生受入れに関する意識調査～」.

田嶋淳子，2010,『国際移住の社会学』明石書店.

Urry, John, 2007, *Mobilities*, Cambridge: Polity Press.（＝2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ—移動の社会学』作品社.）

吉原和男・蘭信三・伊豫谷登士翁・塩原良和・関根政美・山下晋司・吉原直樹編，2013,『人の移動事典日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版.